



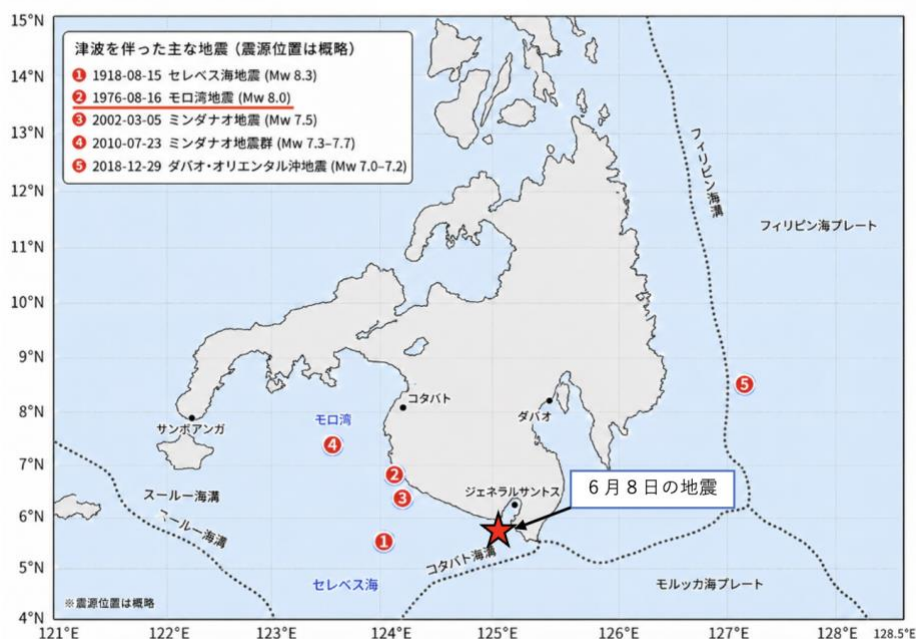
6月8日、フィリピンの地震で津波注意報

2026年6月8日午前8時37分頃(日本時間)、フィリピン南部ミンダナオ島沖でマグニチュード(M) 7.8の地震が発生しました。震源はミンダナオ島南端付近でした。この地震に伴い、日本においても津波の可能性があるとして気象庁から津波注意報が発出されました。日本の沿岸の一部で最大30cm(宮崎県宮崎港)の津波が観測されましたが、これ以上津波が大きくなると判断し、同日16時50分に津波注意報は解除されました。

この地震では最大で改正メルカリ震度階級のⅧ程度の強さの揺れ方になったと推定されています。厳密な比較はできないものの、日本の気象庁震度階級に換算すると震度6弱程度に相当するような強い揺れだったと推測されています。現地からの映像で、建物の倒壊なども報告されています。

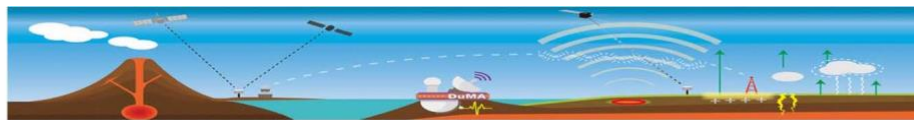
この地震では最大で改正メルカリ震度階級のⅧ程度の強さの揺れ方になったと推定されています。厳密な比較はできないものの、日本の気象庁震度階級に換算すると震度6弱程度に相当するような揺れだったと推測されています。現地からの映像で、建物の倒壊なども報告されています。

ミンダナオ島周辺で津波を伴った主な地震の分布



ミンダナオ島周辺で、これまでに最も大きな被害を出した地震は上記で②で示される1976年の地震です。この地震では、地震発生の数分後にモロ湾・セレベス海沿岸一帯に津波が押し寄せ、最大で4m以上の高さを記録しており甚大な被害をもたらしました。死者・行方不明者は8,000人に及んだと言われています。

ミンダナオ島周辺は極めて複雑なプレート境界域に位置しています。ミンダナオ島の東側にはフィリピン海プレートが西向きに沈み込むフィリピン海溝があり、ミンダナオ島の西側にはスダプレートが東向き沈み込むコタバト海溝があります。2つの沈み込みプレートに挟まれたミンダナオ島はフィリピン変動帯の一部を構成しており、大局的にはミンダナオ島は東西両側からのプレート収束運動による圧縮応力を受けていると考えられています。



震度階について

震度階というのは、実は世界と日本とで異なったものを使用しています。日本(と台湾)では気象庁震度階、世界では改正メルカリ震度階というものが使われています。気象庁のものは震度0から7までで、震度5と6は強弱の2つに分かれており10段階で表現しています。それに対して改正メルカリ震度階はIからXIIの12段階となっています。どちらも「ある地点でどれくらい揺れたか」を示すもので、マグニチュードとは関係ありません。

両者のおおまかな対応は以下のようになっています。

気象庁震度	改正メルカリ震度 (MMI)	状況の目安
0	I	人は感じない
1	II~III	静かな環境で感じる人がある
2	III~IV	屋内で多くの人が感じる
3	IV~V	室内の物が揺れる
4	V~VI	吊り下げ物が大きく揺れる
5弱	VI~VII	不安定な家具が動き始める
5強	VII	家具の転倒が増える
6弱	VIII	建物被害が目立ち始める
6強	VIII~IX	多数の建物被害
7	IX~X以上	壊滅的被害が発生

今回のミンダナオ島沖の地震の最大震度は赤枠で囲ったあたりであったと推定されています。

太平洋津波警報センターについて

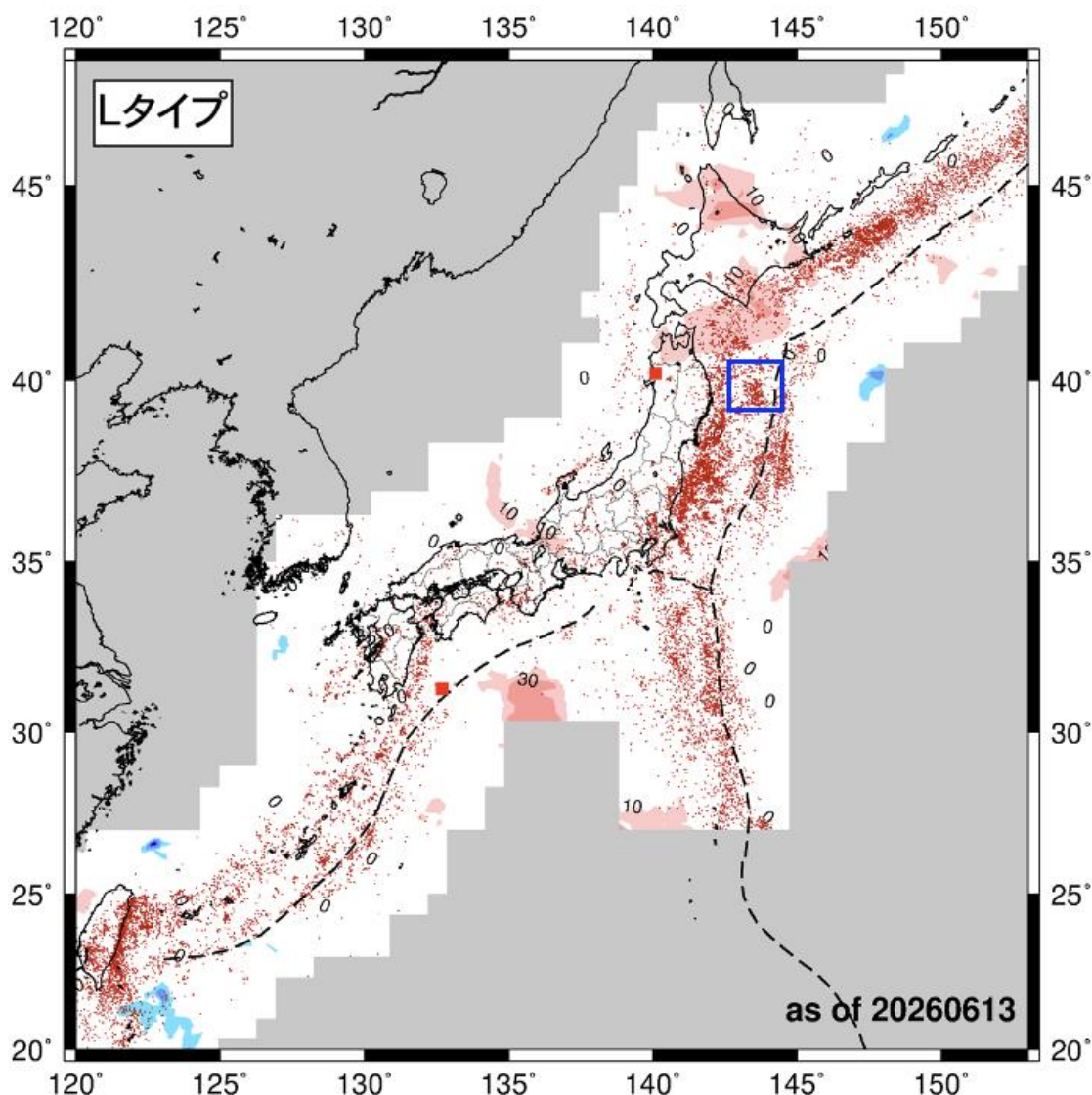
太平洋ではたとえば南米で発生した巨大地震による津波が日本に到達する事があります。実際、1960年のチリ地震では日本では事前の揺れがないまま突如津波に襲われ、死者・行方不明者142名、家屋の全半壊・浸水4万棟以上という甚大な被害を出しています。この地震では北海道から沖縄にかけての太平洋沿岸に2~6メートルの津波が到達しました。当時は海外の地震による津波の予測技術や情報伝達網が未熟であり、気象庁の警報が津波到達の2時間以上後になるなど「不意打ち」の形となったことが被害を拡大させたのです。

このような津波は遠地津波と呼ばれています。遠くの海域で発生した地震によって引き起こされる「遠地津波」から、沿岸住民の命を守るための早期警戒を提供するため、太平洋津波警報センター(PTWC)がアメリカ海洋大気庁(NOAA)に設立され、ハワイに本部が置かれました。

日本およびその周辺の広域地下天気図®

5月4日のニュースレターに続き、現在の気象庁の観測網で解析できる最大範囲の領域の解析です。今週号では6月13日時点のLタイプ地下天気図をお示しします。

この地下天気図解析では原則マグニチュード7.5以上の地震を対象としたパラメータを設定しています。日本列島およびその周辺海域には顕著な地震活動静穏化領域は確認されていません。



上の図の岩手県沖の四角で囲った領域では、4月20日にマグニチュード7.7の地震が発生し、北海道・三陸沖後発地震注意情報が発令された事は記憶に新しいかと存じます。

この領域では、その後も「微動」と呼ばれる体に感じない微小な地震(図中の青丸)が極めて多数発生している事が、産業技術総合研究所の解析で示されています。

地震学的にもこの領域にはまだ歪みが大きく溜まっている事がわかっており、今後かなり大きな規模の地震が起きやすい状況が続いています。

